

ビーチバレー・イノベーションに向けた潜在欲求の検討

Examination of a potentiality desire for beach volleyball innovation

1K03B066-4 木下 潤

指導教員 主査 作野 誠一 先生 副査 矢島 忠明 先生

【問題提起】

日本において約 20 年の歴史があるビーチバレーであるが、ニュースポーツであるがゆえに十分な研究実績がない。そこで、イノベーションの普及過程における阻害要因や潜在欲求に着目して研究を進めることとした。

個人によるイノベーション決定過程には、知識・態度・決定・実行・確信の 5 段階がある。知識段階におけるビーチバレーの認知は徐々に進んでいると思われる。態度段階において好意的態度を示すか否かがまず大きな分かれ目となるが、ここで非好意的な態度を示した場合には、競技の特性に対して根本的な阻害要因を抱えていることが予想され、イノベーションに取り込むのは困難である。そこで好意的態度を示す人々に焦点をあてた場合、採用の決定に至らない人々の抱える阻害要因と潜在欲求を明らかにすることが、ビーチバレーを実行する人々の増加につながると考えた。また、実行から確信段階へと移るビーチバレープレーヤーにおける採用の契機の傾向と潜在欲求を明らかにすることで、ビーチバレーの採用の継続につながると考えた。これらの問題点を研究し、ビーチバレー界に求められている需要を探る必要性がある。

本研究の目的は、

1. ビーチバレーに対する阻害要因と潜在欲求
2. ビーチバレープレーヤーの採用決定の契機
3. ビーチバレープレーヤーの潜在欲求

の 3 つについて明らかにすることにあり、「ビーチバレー・イノベーション」に向けたヒントを得ることを最終目的とする。

【研究方法】

バレーボールプレーヤーとビーチバレープレーヤーのそれぞれに対して、質問紙調査を実施した。バレーボールプレーヤーが抱えていると思われるビーチバレーに対する阻害要因や潜在欲求と、現在ビーチバレーに取り組むプレーヤーにおけるその契機と潜在欲求を見出すという目的の相違から、それぞれ別の質問紙を作成する必要性があった。地域性・立地性においてビーチバレー実行に不利であると思われる八王子市内のバレーボールプレーヤーと、日本ビーチバレー発祥の地である鶴沼海岸、さらには日本唯一の人工施設を運営するアクションスポーツスタジアム府中ビーチバレーコートにおいて調査を依頼した。

【結果】

1. バレーボールプレーヤー

アクセス所要時間が短い。ビーチバレーがシーズンスポーツであるとの認識が強い。ビーチバレーに対して好意的態度を示すプレーヤーが多く、ビーチバレーの経験があるという被験者も約半数に上った。しかしリピーターが少ないという事実も明らかとなった。

・ビーチバレープレーヤー

アクセス所要時間が長い。シーズンスポーツとしての認識はそれほどない。もっと自宅から近い場所にコート・施設があってほしいと思うプレーヤーが多く人工施設の増設に対しても希望が多い一方で、海でやるからこそそのビーチバレーであり現状のコート・施設に満足していると答えるプレーヤーも多かった。

【考察】

1. ビーチバレーに対する阻害要因と潜在欲求

最大の阻害要因として多大なアクセス所要時間を要するという問題点が明らかになり、自宅から近い場所にコート・施設があればやりたいという潜在欲求が高いことがわかった。人工施設の増設やコート・施設に関する情報提供が大切である。

2. ビーチバレープレーヤーの採用決定の契機

バレーボールプレーヤーに見られた「友人に誘われた」という意見も多かったが、決定的な違いはビーチバレーの部活動が一般に設置されていないことにある。また、海を背景とする風景や開放感に惹かれる人や、海やコートが近くにあったためと答える人もいた。

3. ビーチバレープレーヤーの潜在欲求

人工施設の増設を希望するプレーヤーが多い一方で、ビジネス化することの難点も明らかになった。そのため、原点であるビーチバレーというスポーツ本来の面白さを一般に理解してもらうことを欲求している。これこそが発展への起点になるという認知があるためである。

【まとめ】

アクセス所要時間に対する阻害要因から、様々な地域における人工施設の増設が望ましいと思われるが、ビジネス思考での運営には難点が多い。アクションスポーツスタジアム府中ビーチバレーコートの行方が今後の増設・発展を占うこととなる。